

都市再生への取り組み（北海道稚内市）

稚内駅前地区市街地再開発組合 事務局長 中村清司

1. はじめに

宗谷海峡を挟んで、約43キロ先にサハリンを望むことのできる最北端のマチ、稚内市。古くから、沖合底引漁業を中心とした「水産の街」として発展してきました。昭和52年のソ連（現ロシア）200海里漁業専管



図1 稚内市位置図

水域設定以来、底引船の減船並びにそれに伴う原魚不足による水産加工業の衰退、人口の減少を招くとともに、みなとに隣接する中心市街地（中央地区）では、モータリゼーションの進展への対応の遅れや建物の老朽化による住環境の悪化、大型店舗の郊外進出等により、郊外への人口拡散が続き、かつての賑わいを失いつつありました。

稚内市では、平成14年度に市街地の将来像を描いた「稚内市市街地総合再生ビジョン」を策定し、個別に進められていた「稚内港マリンタウンプロジェクト」、JR稚内駅周辺整備を含む中心市街地活性化の取り組み、第一副港地区で進められている「シーランド計画」の相互の機能調整を図ることとしました。

また、平成14年12月、国から「全国都市再生のための緊急措置（～稚内から石垣まで～）」において、稚内市のまちづくりの取り組みが都市観光推進のためのモデル事業として採択を受け、そのテーマとして当時の小泉内閣総理大臣から「日ロ友好最先端都市」と命名を受け、平成15年度に改めて「都市観光の推進」に向けた市街地整備、活性化方策、推進システムなどについての方針を加え、「稚内市都市再生ビジョン」を策定し、実現に向けた取り組みがスタートしました。

2. 市街地（マチ）と臨港地区（みなと）が一体となった都市構造の形成

市街地総合再生計画（平成15年度策定）では、都市軸・拠点・ネットワークの形成を基本方針に、JR稚内駅周辺を「複合交通ターミナル（駅舎・交流施設・駅前広場・駐車場等）」と位置づけ、交通・情報・観光・暮らしの総合的な拠点、「マチ」と「みなと」を結ぶ接続拠点として機能させることを目指し、市街地再開発事業、街路事業、港湾事業等を構成事業とし、事業化に向けた検討が進められました。



図2 稚内駅周辺完成予想図

3. 稚内駅前地区第一種市街地再開発事業

稚内駅周辺整備事業の総合的な拠点として位置付けられた本事業施設は、平成18年3月に都市計画決定を受けましたが、その後、施設規模、事業採算性の再検討などにより、平成20年3月、平成20年10月に都市計画変更を行っています。

平成20年11月10日に事業認可を受け、平成21年7月着工、このたび平成24年3月10日に竣工をしました。



図3 再開発ビル「名称：キタカラ（KITAcolor）」

本施設は、敷地面積約3,440㎡、鉄筋コンクリート造地上5階建、延床約6,785㎡で、1階は、吹き抜け空間（アトリウム）を挟んで、本事業と一体的に全面改修工事が行われたJR稚内駅とつながっており、駅前バスターミナル、コンビニエンスストア、飲食・物販、情報コーナーなど、2階は、映画館、多世代交流ロビー、キッズルームなどが配置され、3階にグループホーム（2ユニット）、4、5階にサービス付高齢者向け住宅（36戸）が入居します。



図4 完成間近の稚内駅周辺整備事業

計画がスタートしてから約10年。平成24年4月29日に稚内駅周辺整備事業が完了し、グランドオープンを迎えます。